

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本とロシアの民話における人間と動物の関係
Author(s)	ドミートリー ポペレチュヌイ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1998 : 75 - 80
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039391
Right	
Relation	



日本とロシアの民話における人間と動物の関係

ドミトリー・ホペレチュヌイ

はじめに

小さい頃昔話を讀んだことのない人はいないであろう。この世に生まれてくる子供がこの世の事情を理解しようとするのは当然のことである。このような子供に親が最初に讀むのは昔話である。昔の人々がどんな生活をしてきたかを聞きながら、子供は、昔話を通じて、自分が大人になってからの生活に欠かせない知識を獲得していく。人間の心理、道徳、人間関係など、この世に無事に生きていけるための知恵、自分にとって有益なものをいろいろ知ることができる。

ところで、昔話のなかでは、動物が活躍している話が少なからずある。民話では、動物は、人間にとって身近な存在であり、動物との付き合いは当然のこととされる。このような話を聞いている子供は、無意識のうちに民話に出ている動物、自然との付き合い方を習得し、日常生活の中でもそれを応用してみる。しかし、民話はどうのような付き合い方を教えてくれるであろう。これが非常に気になって、私は日本とロシアの動物民話を比較し、民話の中の人間と動物との関係を調べようと思った。当論文では一番頻度の多い人獣交渉のパターンを見つけ、検討してみたい。

1.動物民話の起源と発展。動物民話における人獣交渉型の民話の位置。

動物民話は民話の中で最も古くから語られているものと考えられており、その起源は、人間がまだ動物の世界から完全に離脱していない原始時代にさかのぼる。この時代は、人類は農耕経験を持たず、採集と狩猟を行っていた。自分と体格、挙動、生活様式が類似している動物の世界を考察し、人間は動物と自分の類似性を考えるに至ったと考えられる。一方、動物は、人間にとって人生を支えるとても重要な生活資源でもあった。そうした中で人間は、動物を神聖化し、人間と動物は血縁関係にあると考え、トーテミズムを作り出した。

当時、狩猟行為全ては、神聖なトーテミズム上の儀式によって規制されていた。その儀式を三つの種類に分類できる。狩猟の前に長老やシャーマン(巫女、巫者)によって行われる神秘的な儀式と狩猟現場で行われる男性のエネルギーに満ちた活発な行動儀式と狩猟の後、部落の広場などで行われる豊猟感謝の儀式である。第一の型は豊猟を祈る儀式であり、第二の型は狩猟民の集団が獲物として狙う動物となる一団とそれを追う一団に分かれて行う儀式であり、そして第三の型は種族の繁栄を称え、人間の生命力を解放する儀式である。その三つの型の儀式の中で使われる動物の習性、挙動、また狩猟方法についての知識が、時代とともに言葉の形式を取り、そして民話となったと推察できる。その際、第一の型の儀式に使われた呪術的な動物起源譚や精霊譚が後世の動物由来譚の発生につながり、第二の型の儀式に関わる原始的な演劇や舞踊に刺激されて動物競争や動物葛藤といったような動物民話が発生した。

人間と動物の交渉は、狩猟時代が過ぎても、その重要性を失うことなく、永く人間の生活を支配してきた。狩猟と採集に代わり農耕の時代が到来し、動物への依存の程度が低くなっても、人間の意識に奥深く刻み込まれた動物信仰は、影響を弱めずに、動物民話の原動力としての役割を果し続けていった。この時代は、狩猟場で起こる戦闘的な関係や人間の生命に脅威を与える猛獣に対する敬遠的な関係と対照をなしている親和関係を生み出す。つまり、危険から人間を救ってくれたり、福德を授けてくれたりする動物が活躍する物語が登場する。この物語の中に出てくる動物は、動物でありながら、神のような宗教的な靈力を持

ち、超人的機能を發揮しうる存在と見なされる。

このような人間の動物観の変化を考えると、動物民話の発展は、次のようなものに見えてくる。一番最初に登場するのは、狩猟対象である動物の生態、習性を描いた動物由来譚である。しかし、現在記録されている由来譚は、原型と異なっており、模倣や戯れの様子が強く現れている。その理由として次のことが考えられる。時代の変化、つまり狩猟から農耕への転化とともに動物の生態に関する明白かつ詳細な知識が不必要になる。それに伴い、由来譚の原型が歪められ、現存のような遊戯的な話が作り出されたと考えられる。

次の段階では、人間と動物の接触の方向が進んでくると、動物の行動や性格に人間の感情が持ち込まれ、擬人化への趣向が現れてくる。そこで、援助譚、報恩譚、異類婚姻譚といった新型の民話が続々と生まれてくる。一方、動物が持っている神秘性や超人的機能を神から授かったものと見なし、そして特種な動物を神と人間の間の媒介的な存在として神聖化する傾向も出てくる。すると、上述のような信仰に基づいた神獣交渉をテーマにした民話が發生する。

このように、人獣交渉型の民話は、狩猟が人間の主要な営みとしての役割を失った農耕時代に発生したと推定されている。この時代に人間は、独力で作物を作ることになり、生活が以前より安定してきた。すると、自然を支配する力が高まり、人間は自分を特種な存在と見なすにいたった。そして、周囲のもの全てを自分の意識を通じて考察するようになる。それで、自分の思考力で説明できる行動を示す動物、あるいは日常生活の中でよく接する動物は、擬人化され、人獣交渉の型の話に主人公として登場するようになる。それに対し、珍しい、あるいは人間に恐怖感や畏怖感を抱かせる動物は神聖化され、人間を超越した存在、神のものと思なされ神獣交渉をテーマにした話に出てくるようになる。

さて、上述のことを考慮に入れ、当論文の目的である日本とロシアの人獣交渉の型の民話を比較していこう。

2. 日本とロシアの人獣交渉型民話の比較。

両国のこういう型の民話は、全体として同様の特徴を有する。先ず、話の中に登場する動物を二つの大きなグループに分類できる。自然の中で見られる動物の属性を有する動物と、民話の世界だけで見られる人格化された動物である。第一の型の動物との交渉を検討していけば、人間の生活の中で使われていた動物の種類や話が作られた地域に棲息していた動物の分布など、様々な民族学上価値のある問題が研究できるであろう。しかし、当論文は、人間の思想を反映している民話特有の人間と動物の関係を調べることを目的としているから、第二の型の動物を中心に考察を続けたい。

日本とロシア、両国の動物民話の中で多々あるのは援助や報恩をテーマにした話である。つまり、困難に陥った人間を動物が助けに来て、いろいろ手を貸して、人間を苦境から救うという援助譚と、人間に命を救ってもらった動物が人間に福德を与えるという報恩譚である。先ず、動物援助譚を考察しよう。日本の民話、「カチカチ山」(東北地方)、「禾やりを歌う狐」(長野県)、「灰まき爺さん」(東北地方)、「狐の飛脚」(鳥取県)などの話とその明白な例である。

「カチカチ山」： たぬきが年寄り夫婦の畑を荒らして、大きな被害を与える。おまけに、老婆を殴って殺す。妻に死なれ、途方に暮れた翁を助けにくるのは一匹のうさぎである。うさぎは翁を慰め、そしてたぬきをだまして死なせる。

ある動物が現れ、人間に被害を与えたものを殺すという型だけでなく、貧乏人の家に来て、その人を幸せ

にするという筋の話も少なくない。

「灰まき爺さん」 薪にしか使えようのない木の根から白犬が出てきて、木を捨てた翁のためにつくし、森から沢山の動物を追い立ててきて、その人を金持ちにする。

もう一つのパターンは動物が自分と同じ場所に住んでいる人を守る、あるいは動物が人の家に住んでいて、その家の人に仕えるというものである。次の二つの民話はこのタイプに当てはまる。

「木やりを歌う狐」 ある町の近くの山に木やり歌をよく歌う狐が住んでいる。狐が歌うと、町の人々がその声の大きさに町に災いが起こるかどうかが予知できる。ある日、町に泥棒がきて千両箱を盗んで逃げようとする。ところが、狐は泥棒が隠れている所を見つけて泥棒を捕まえる。

「狐の飛脚」 鳥取県の殿様の家に狐がいる。その狐は走りがはやく、鳥取と江戸の間手紙を運び届ける仕事をしている。

ロシアの動物民話の中でも、動物援助譚がある。しかし、日本の同種の民話に比べると、パターンが同じでありながら、登場する動物が違う。例えば、動物が人を助ける型の民話には、牛、馬、犬など、野生動物でなく、家畜が出てくる話が多い。「大きな燕」は主人が大きな燕を引き抜けようとしているがなかなかぬけない時、家族はもちろん犬、猫、鼠でも、家にいるものすべてが助けに来るとする筋の話である。この民話は、家畜が家族の一員であり、人間の生活に密着しているという発想から生み出されたものと考えられる。

民話における人間と家畜の関係をさらに考えると、人間と家畜の間に生じる強い愛情をもとにした関係が多いことが分かる。その一例として、「ハプロシェチカ少女」という民話が挙げられる。

継娘と、家で飼っている一匹の牛とが仲良しであることに気づいた継母は、夫に頼んで、その牛を殺させる。もうすぐ殺されるという時、牛は、自分が殺されて食べられた後残った骨を拾って、土に埋めるようにハプロシェチカに頼む。少女が全部言われた通りにすると、土の中から木の芽が出て、見る見るうちに立派な林檎の木が生えてくる。その木には、牛の魂がやどっていて、林檎が取れるのはハプロシェチカだけである。ある日、少女が住んでいる家の前を王子が通りかかり、その家の人に林檎をくれるように頼む。すると、継母の連れ子の娘が林檎を取ろうとするが、失敗に終る。ところが、ハプロシェチカは、簡単に林檎を取り、王子に渡すと、王子に求婚される。このように、牛が少女を幸せにしてくれる。

この民話の例から見えてくるのは、死を越える人間と家畜の間に見られる強い愛情の絆である。

昔から牧畜を行っていたロシア人の民話に家畜が登場するのは、当然のことであろう。野生動物と違って、家畜は、人間に対して警戒心を持っていないし、人間に馴染みやすい。このような家畜の性質は、人間と動物の強い結び付きをテーマにした民話の発生を可能にする。一方、日本人は、本来農耕民族であり、家畜との付き合いは、近年になって始まったものである。それで、家畜が物語の主人公にならないのは、不思議ではない。

動物援助譚に関してもう一つ興味深いのは、ロシアのおとぎ話に、魔力を持っている動物が数多く登場するという点である。奇麗な女性に変身して人を魅惑する火の鳥、空を飛べる瘤の子馬、変身能力を持っている灰色の狼など、色々ある。日本のおとぎ話の中でも、女に化けて人をだましたり、人と結婚する狐の話が多々ある。しかし、狐が活躍している空間は、この世、つまり現実の世界である。それに対し、ロシアのおとぎ話の中で活躍している動物は、外観はこの世の動物と同様でありながら、本質は異なる。このような動物との交渉に巻き込まれる人間は、自分が現実と違った場所にいるような感じがし、普通と随分違った感覚を覚える。つまり、このような人獣交渉は、現実の範囲を越えた非現実的な世界との接触であり、こうし

た交渉の中では、人間の本質まで変わることもある。例えば、「王女の水晶の山」という民話では、イワン王子が動物の言い争いに片を付け、感謝している動物から、鷹と蟻に化ける力をもらう。その力を使って、王子は大蛇を殺し、王女を救い出して、ついに彼女と結婚できる。

動物援助譚の中核は人間が動物に恩を受けるテーマであるのに対し、動物報恩譚では動物が人間に受けた恩に報いるのが中心的な筋である。報恩譚の基礎には、善意が善意をもって報いられるという人倫的な発想があり、この型の民話は子供の教育も目的にしていると考えられる。動物報恩譚のパターンに最も多いのは、人間が死にかかっている動物の命を救うとか、猟師が動物を射殺しようとする時、その動物に殺さないように哀願されて観念するとか、苦境に陥った動物を家に連れてきて暫く飼うといったものがある。例として、次の民話が挙げられる。

日本の民話

「狐の味噌煮釜」(東北地方) 命を助けられた狐が茶釜に化けたり、女郎に身売りをしたり、ついに青馬となって責め殺されるまで、貧しい農民のために尽くしている。

「鼠の相撲」(東北地方) ある鼠が、長者の家の鼠に、自分がもちをご馳走になった年寄りの家にお金を持ってこさせて、その年寄りを大金持ちにする。

「舌きり雀」(北陸地方) ある農家で飼っていた雀が、自分を可愛がってくれた爺には、宝物一杯のつづらを与えるが、舌を切つて家から追い出した老婆には、恐ろしい物一杯のつづらを与えて死なせる。

「狐のお礼」(中部地方) ある翁が、雨に濡れて震えている子狐を気の毒に思い、家に持ってくる。そして、飼うようになる。ある日、狐は森に戻るが、親狐がお礼に折り詰めを持ってくる。

ロシアの民話

「カマスが言った通り」 若者が魚釣りに行って、大きなカマスを捕る。そのカマスは、殺さないように頼み、命を助けてくれれば、三つの願望を叶えると言う。すると、若者はカマスを逃して、家に帰る。カマスの言ったことはすっかり忘れてしまう。しかし、しばらくして、突然思い出して願いを唱えようとする。そうすると、願いが叶う。結局、カマスのお陰で若者は王女と結婚して、幸せになれる。

「狐長者」 独り暮らしの猟師の家に鶏を食べにやってくる狐がいる。ある日、猟師が狐を捕まえ、首をひねようとしたら、狐は命を助けてくれるように頼む。そのお礼として、その男を大金持ちにする約束をする。根の優しい男は、狐を許し、ご馳走する。すると狐は、狼、熊、穴熊をだまして、王様の所へ連れて行って、その動物は全部その男からの贈り物だと、王様に言って嘘をつく。そして、どうしても猟師の家に行きたがっている王様をだまし、他の王様の所へ連れて行って、そこで猟師に会わせる。猟師は大金持ちだと間違っている王様は、猟師と王女を結婚させる。

「怪獣退治」 ある王様の獣小屋へ毎晩カワウソが入っていて、獣をとって食べる。そこで、一番下の王子がカワウソの隠れ場所を見つけて、一人で地下の国へカワウソを退治に行くことにする。カワウソを殺し、地上へ上がろうとするが、兄弟に縄を切られて、地上へ出られなくなる。すると突然、そばに雨に濡れた鳥の雛を見つけ、王子はその雛を助ける。そうしたら、親鳥が飛んできて、王子を地上に上げてくれる。

「かもの少女」 ある猟師が負傷した鷺に飼ってくれるように頼まれて、3年飼ってあげる。すると鷺は、恩返しに猟師に金の小箱と金の鍵をくれる。それで、猟師の息子が異郷の国の所へ行って、

王女と結婚できる。

以上の民話の例からすれば、報恩譚の構造は、日本の民話にせよ、ロシアの民話にせよほぼ同様である。動物に優しくした人がその動物のお陰で幸せになれるという素朴な発想が一見でたために見えても、よく考えると、立派な発想であることが分かる。この民話の中の動物に自然全体が体现されていると仮定してみよう。そうすると、自然との対立でなく、共存こそ人間の生活の原則として考えるべきだという発想になる。自然の恩を大量に受ける人類は、自然を破壊したり、自分の都合ばかり考えて自然を造り直したりしてはならないというわけである。自然に対する優しさこそ人間が従うべき道徳であるというメッセージが見えてくる。確かに、人間は、動物援助譚、報恩譚の中心人物であり、動物に体现された自然から様々な形で恩を受ける。又、物語の筋においては、人間が幸福に達する道が主要なモチーフである。しかし、恩を忘れてはならないとか、同情心のある人は幸福になれるといった発想からすれば、人間は、受ける立場だけでなく、与える立場にも身を置くべきという理念にもつながるであろう。

日本とロシアの動物援助譚、報恩譚をさらに比較してみれば、もう一つ興味深いことが分かる。それは、日本の民話全体の特徴である残酷性がこういった型の物語にも現れているということである。ロシアの民話と違って、日本の民話には、人間に恩を与えた動物が殺される場面を終る話が少なくない。前述の民話の中にも、こういった話がある。「木やりを歌う狐」では、町を泥棒から守った狐がついに鉄砲に撃たれて死ぬ。「狐の飛脚」では、殿様のために尽くした狐が、焼き鼠を食べようと思ひ畑に入ったら、わなにかかって死んでしまう。「灰まき爺さん」では、下の爺の家で飼っていた白犬が、自分を酷使する上の爺に対し、蜂に爺を刺すように言いつけ、反撃する。その仕返しとして、立腹した上の爺は、犬を叩き殺してしまう。

このような民話では、残酷さに満ちたこの世の現実がまさにはっきりと現れている。ロシアの民話と違って、日本の民話では、事物描写の場合より正確に現実を記述していると考えられる。それに対し、ロシアの民話では、理想化された現実が現れている。

さて次は、援助や報恩の関係から離れて、人間と動物の婚姻関係を考察していこう。この関係をテーマにした異類婚姻譚は、ロシアにも日本にもある。基本的には、人間と異類の婚姻は、組み合わせと成立の場によって、次の四つの型に分けられる。「人間の男の家に異類の女が嫁にくる」、「人間の男が異類の女の所に婿に行く」、「人間の女の家で異類の男が婿に来る」、「人間の女が異類の男の所に嫁に行く」という型である。日本では、この四つの型の話が少々残っているのに対し、ロシアでは、このような話は殆ど残っていない。現存のロシア民話の中から挙げられるのは、女と熊の間に子供が生まれるという筋の話である。例えば、「イワン・ダマツ子」では、農民の妻が森に行き、道に迷い熊のねくらにやってくる。そして、熊の虜になり、熊と一緒に暮らすようになる。暫くして、二人の間に男の子が生まれる。腰までは人間で、腰から下は熊という不思議な存在である。その子供が大きくなると、女が子供を連れて逃げ、夫の家に帰る。

また、「ダニーロと白鳥姫」では、ダニーロという貴族の男の前に、とても美しい白鳥姫が現れてきて、私を嫁にもらって下さいと言う。そうしてくれれば、ダニーロが欲しいテンの外套を縫うという約束をする。白鳥姫は、暫くダニーロと一緒に暮らすのが、ダニーロの友人にからかわれ、怒って去って行く。このような

物語を考察すると、古代のロシアでも、日本と同様の型の話が語られていたと言えるであろう。しかし、10世紀にキリスト教が導入された後、異教とされた当時の自然信仰が厳しく圧迫されたのである。スラブ人の異教を強く反映していたおとぎ話もその圧迫の対象となり、11世紀には教会からおとぎ話を語るの全面的に禁止された。以上のことから、現存の民話は昔語られた話に起源を持つが、キリスト教の圧迫による影響を受けて、原型の話と多少異なるものとなっていると考えられる。その中で人間と動物の血縁関係を反映

する異類結婚の話が殆ど残っていないことは不思議ではない。原型の話が変形していったのは、動物に変身できる能力を持つ人間が主人公である話や魔法をかけられ動物になった人間にほれて、結婚する人が現れたら、魔法が解けるといった型の話である。

上述のことを考慮に入れると、もう一つ日本とロシアの民話の根本的な違いが分かる。つまり、ロシア民話の場合は、歴史的な要素の影響がかなり大きいものである。それに対し、日本の民話では、古代の人間の意識がより明確に出現されている。

おわりに

動物民話の起源はトーテミズムが盛んだった原始の狩猟時代にさかのぼる。動物の習性や挙動が住民の重大関心のもとであったから、動物の生態に注目する由来譚が発生したと推測される。人獣交渉型の話が誕生したのは次の段階である。この段階では、動物が擬人化され、その性質や挙動には人間の感情が強く現れてくる。当論文では、人獣交渉をテーマにした日本とロシアの動物民話から取り出した援助譚、報恩譚と異類婚姻譚が検討された。その結果は次の通りである。

両国の人獣交渉型の民話は同様の発想を基底にしている。援助譚の場合は、苦境に陥った人間が中心におり、話の中にある動物が登場し、人間を助ける。報恩譚では、人間から恩を受けた動物が恩返しに人間のために何かをする。そして、異類婚姻譚では、人間と動物の結婚が筋に含まれている。この型の民話は動物の世界から離脱した人間の苦悩を反映していると考えられる。人間と動物が結婚しても、その関係が永く続かないということは異類婚姻譚の中で示されている。つまり、人間が動物と異なるという人間の意識が現れている。しかし、自分の独自性を知った人間は、自然の世界から追い出されるのを恐れるかのように、動物に自分との同質性を持たせ、自分とほぼ同様のものとして捉えるに至ったのではないかと考えられる。そこで、動物援助譚や報恩譚が発生したと推測できる。

日本とロシアの民話を比較して分かるのは、日本民話の方が上述のような原始的な発想が残っているということである。ロシア民話の場合はキリスト教の影響が強く、本来の発想が歪曲されている。